

潮騒通信「どっこい生きてます！」

リュウジ安らかに～死せる仲間へのレクイエム

潮騒 JTC はまた一人、掛け替えのないアルコール依存症の仲間を失いました。潮騒ファイザープロジェクトのサブリーダーだった、元スタッフのリュウジです。死に至った詳しい状況は分かりません。というのもリュウジは、昨秋のフォーラム直前にたった一人の肉親だった母親が急死し、葬式のために一時実家に戻って以降、一方的に私たちとの連絡を断っていたからです。何度か連絡を試みましたが、携帯電話は通じません。私は気になりながらも多忙な日常に追われ、やっと今回実家を訪ねることができました。しかし、知らされたのは彼の訃報でした。「こうなることは分かり切っていたのに…」「もっと早く救いの手を差し伸べておけば…」「親族がもう少し依存症に理解を示してくれたなら…」。自責の念に駆られながら、私は言葉にできない悔しさと、ぶつけようのない怒りの感情を抑え切れません。

リュウジ本人は「葬式が済んだら、みんなの所へ戻ってきます」と、潮騒で引き続き回復の取り組みを考えていました。しかし、親族がそれを許さなかったようです。「いつまでもあんな施設にいてもしょうがないだろう。きちんと就職して、親の残したこの家をしっかり守っていけ」。彼が相当なプレッシャーを受けていたことは私たちにも漏れ伝わりました。リュウジは真面目すぎるほど真面目な“アル中”でした。酒に対する親和性が人一倍強く、人間関係のストレスから一度でもアルコールを口にすれば連続飲酒につながりました。何度かトラブルを引き起こし、肉体のダメージも極限化していました。潮騒につながって 2 年、一度スリップしたものの 1 年以上クリーンが続き、本人も自信を深めていました。とてもシャイな性格で、多くを語らずここ一番という時に口を開くタイプでした。社会常識もあり、私は次世代リーダーとして成長してほしいと密かに期待していました。

葬式を終えたリュウジは悩み抜いたはずで、25 年間もがき苦しんできた酒がやっと止まり、潮騒で自分の居場所を見つけたのです。仲間から信頼され、プログラムにも前向きに取り組み、回復の意味合いを実感し始めていた時期でした。その一方で、家族を失って一人ぼっちとなったリュウジは親族の思いに必死でこたえようとしたはずで、世間の「常識」に合わせようとすれば、潮騒での回復生活は否定的に映ります。人格が引き裂かれる思いだったことは想像に難くありません。その重圧から逃れようとアルコールに逃げたことを、誰が責めることができるでしょうか。彼は自身のスリップが死につながるだろうことは熟知していたはずで、それでも飲酒するのが依存症という病魔の正体です。彼は自らの死と引き替えに、そのメッセージを潮騒の仲間たちに伝えてくれました。私たちにとって仲間からの孤立は死を意味します。リュウジ、もうアルコールとの果てしない闘いに苦しむ日々は終わりました。どうか安らかに眠ってください。(設長 栗原 豊)

SJTC

SHIOSAI JOB TRAINING CENTER

2013 (平成 25) 年

5 月号 一部 100 円

Contents

- P1 亡き仲間への鎮魂歌
- P2 園児と一緒に田植え
- P3 横浜ダルクとGW交流
- P4 写真で見る交流風景
- P5 那珂川CFの取り組み
- P6 施設の話あれこれ
- P7 進藤牧師宅を訪ねて
- P8 近藤さんインタビュー 13
- P9 全国受刑者からの便り
- P10 しおさい俳壇の作品
- P11 しおさい俳壇・特選句
- P12 行事予定 & 献金献品



リュウジ安らかに。第 2 回潮騒フォーラムでは司会を務めた

「北浦田んぼ」で保育園児と一緒に田植え

＝遊び感覚で楽しく手植えで交流＝

潮騒 JTC が運営する水田の一つ、鹿嶋市中の通称「北浦田んぼ」で 5 月 14 日、潮騒とは協力関係にある同市平井の「プー横丁保育園」(山下佳子園長)の園児やスタッフ 11 人と潮騒 JTC の農業自然隊メンバーら約 20 人が、一緒に田植えを行いました。潮騒が取り組む農業プロジェクト関連イベントの一環で、既に大部分は機械で植え終えています、あえて手植え部分を残して保育園児との触れ合い体験の機会をもうけました。

◆5・94㍓の水田に一列に並んで手植え

この日は午前 11 時から田植えを開始。参加した園児 6 人が潮騒のメンバーや保育園のスタッフと一緒に、5・94㍓の水田に一列に並んで手で苗を植えていきました。最初はみんなで苗を植えていましたが、中には途中で飽きてしまって泥んこ遊びや水遊びをする園児たちもいました。それでも正午までの約 1 時間の間に、半分近くまで田植えが進みました。

田植えに参加した保育園の男児(6歳)は「面白かった」と話してくれたものの、「オタマジャクシを捕まえるにも面白かった」と子供らしい感想。他の園児や潮騒の仲間たちと一緒に水遊びに夢中になっていました。

熱心に手植えをしていた同園の女児(3歳)は「初めてやったけど、とても楽しかった。来年もしたい」とリクエストしてくれました。一緒に田植えに参加した保育園のスタッフは「子供たちも一生懸命に頑張ったので良かった」と述べ、山下園長は「とても楽しそうでした。(水田に入ったときの)最初の感覚が気持ち良かったです」と話してくれました。

◆昼にはデイケアの仲間たちも見学に

自然隊メンバーのカツミさん(40)は「収穫が目的だけど、子供に田んぼに入ってもらうのも大事なこと。慣れやすい子供やすぐに植え方を覚える子もいて面白かった」「団体でやるから(子供の)1人が遊ぶと

連鎖しちゃうけど、それが子供らしさ。俺ができなかったことを子供たちがしてくれた」と充実した体験になったようです。

お昼休憩の時間にはデイケアの仲間たちが見学に訪れ、園児と仲間たちが植えた田んぼを見学しました。園児たちも潮騒の仲間たちと打ち解けた様子で、肩車

や水遊びをするなど、まるで「家族でのピクニック」の雰囲気でした。

午後からは、自然隊など潮騒の仲間たちだけで田植を再開。時折メンバー交代

をしながらも田植をこなし、午後 2 時頃までに手植えによる田植をすべて完了させました。

◆小学校時代の体験学習を思い出した

田植えに参加したイケさん(68)は「良かった。頑張った。みんなの力を借りた」と述べ、「泥の中から足を引っ張るのがきつかった。ふざけないでやっているのが良かった」と話しました。女性メンバーのちーなさんは「小学校時代の(田植え)体験学習を思い出した。途中で腰が痛くなり、休んでいるほうが多かったと思うけど、自分なりに頑張った」と満足げに話し、腕を見せて「日に焼けてしまった」と笑っていました。

園児との田植の前の 10 日には、鹿嶋市内の鹿嶋ハイツ下にある、通称「鹿嶋ハイツ下の田んぼ」でも田植が行われ、潮騒の農業自然隊が田植機で田植を行いました。

(サッキー)



GWに横浜ダルクと意義ある分かち合い

潮騒JTCが日頃からお世話になっている先輩施設、横浜ダルク（坪倉洋一代表）のメンバーが5月2日から4日まで鹿嶋の地を訪れ、潮騒の入寮者らと交流を深めました。ゴールデンウィーク（GW）中のイベントとして取り組んだもので、日帰りの日程が多いダルクフォーラムなどではなかなかできない濃密な分かち合いの時間を持てました。横浜ダルクの皆さんお疲れ様でした。ありがとうございました。（栗）

★「ホーム&アウエーでやれたらいいな」★

日頃から潮騒JTCが何かとお世話になっている先輩施設、横浜ダルクの皆さんと交流を深めました。5月4日にはソフトボール交流試合をしました。横浜ダルクの皆さんの若々しいプレーに感動し、潮騒のメンバーも持てる力を発揮して随所にファインプレーや珍プレー？ が続出し、とても楽しい試合でした。

施設対抗でやることによって、いい意味での競争心が芽生え、勝敗そのものよりも応援を含めた全員が一生懸命プレーしたという充実感が素晴らしかったと思います。それを応援することで、横浜ダルクと潮騒JTCのみんなが一体になったのもよかったです。

両チームとも一生懸命にプレーすることで、良い分かち合いができました。みんな普段とは違う一面を垣間見せていました。これからは横浜ダルクとの交流試合を定期戦として位置づけ、ホーム&アウエーでやれたらいいな、と思いました。潮騒も技術を磨き、いい試合ができるようチーム全員が努力していきます。

今回、横浜ダルクとの交流プログラムの5日間が実現できたことに感謝します。各地に多様な個性を持つダルクが生まれていますが、ダルクの精神は同じです。今後も施設の枠を超え、同じ依存症の病氣を持つ多くの仲間たちと、いろいろな形で分かち合いができる機会が増えることを願っています。（オカ）

★「潮騒の力も捨てたもんじゃないぞ」★

薫風のようなさわやかな印象を残して5月6日、横浜ダルクの仲間たちは帰りました。あっという間に時は流れて、仲間との思い出と疲れが心地よく残っています(^_^)。最初に話があったときはただ漠然と受け入れることだけで、プログラムは同じスタッフのマコトさんにお任せ状態でした。

でも、みんながそれぞれの立場で持ち味を発揮して取り組み、今年のゴールデンウィークはボーリングに始まり、ソフトボール・サーフィン・ラストにカラオケ・ビンゴ大会・オープンスピーカーと盛り上がり、例年になく充実感を味わえました。横浜ダルクの皆さん、ありがとうございました。来年もよろしく！

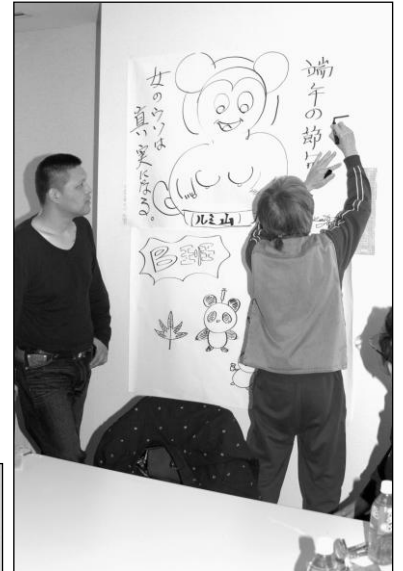
私は自分のコンプレックスとして劣等感が根強くあります。仲間たちの前でつい「いいところ見せなくちゃ」と気負ってしまうのだけれど、今回は気さくな横浜の仲間とスピリチュアルな魂の深い部分で触れ合うことができ、「自分も含め潮騒の力（企画力？）もなかなか捨てたもんじゃないぞ」と感じました。

時として“井の中の蛙”になりそうな自分ですが、施設の枠を超えて同じ仲間同士が集い合うことの意義を再確認させられました。どうやら新しい自分を今回のプログラムの中で見つけられそうです。案外イケてるぜ、自分。そう気張らずに行こう…。（トム）

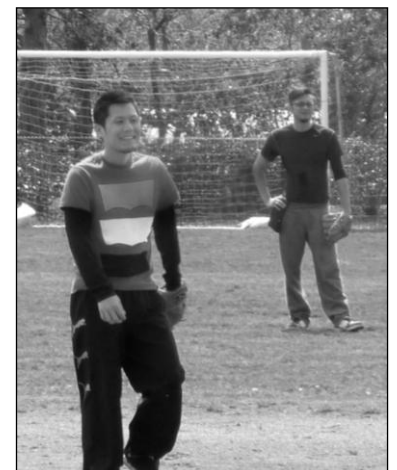


続・横浜ダルクとの交流会

横浜ダルクとの交流会が5月3日、潮騒デイクア施設でありました。潮騒の仲間たちと横浜ダルクの仲間たちが一緒になって5つの班に分かれ、30秒ずつの自己紹介。その後、渡された模造紙に「面白い絵」を班ごとに描いて発表しました。その後、「今日は何の日」「(薬物・アルコール・ギャンブルなどの) 欲求が入ったときにどうするか」などを話し合いながら、別に渡された付せん用紙に「自分の良い所」と「自分の隣の人の良い所」を書き出して、自分が知らない「良い所」を知ってもらうなどのゲームを行いました。(崎)



今年のGWはボーリング、ソフトボール・サーフィン・ラストにカラオケ・ビンゴ大会・オープンスピーカーと盛り上がりました。横浜ダルクの皆さん有難うございました。(マコト)



「農業を通じて依存症の回復を」

＝栃木ダルク那珂川CFの柴田施設長が講演＝

潮騒 J T C の仲間たちが依存症を克服して就職し社会復帰するため、いち早く農業分野で幅広い取り組みをしている栃木ダルク那珂川コミュニティファーム (C F) ・柴田隆治施設長を招いて、「第 3 回ファイザー就労支援実践講座」が 5 月 3 日、鹿嶋市宮中の同市まちづく市民りセンターで開かれました。前年に続き潮騒が継続支援を受けているファイザープロジェクトの一環です。

※ ※ ※

柴田施設長は「農業を通じて依存症の回復を」と目標を掲げる那珂川 C F の様子をパワーポイントを交えて説明しました。農作業を午前中に行い夜に N A を行うスケジュールを紹介した上で、農作業を依存症回復プログラムに取り入れる長所として「やりがいが出る」「自分のやったことの成果が目に見える」「人間性が取り戻せる」などと説明しました。

入寮者の傾向としては「人とのコミュニケーションが下手」「人の考えが納得できない。こだわりがある」などの特徴を述べた上で、今後の課題として「達成感があるものの全員が持てるまでには至っていない」「農作業優先になってしまっ

て回復プログラムがおろそかになってしまう」などを指摘しました。また、那珂川 C F で収穫した農作物を宇都宮市の「軽トラ市」で販売するなどして、「最初から最後まで自分たちでやれる」という達成感を持たせる取り組みなどを紹介しました。

＊「ご苦労さん」と言えばいい

質疑では、潮騒 J T C でも農作業に取り組んでいることから「農作業に意欲的に取り組んでもらううまい方法」について質問が出ると、柴田施設長は「『ごくろうさん』と言えばいい。草むしりをした人でも『ご苦労さん』と言えばいい。できなかった人ができるようになる」と答えました。また、農地

を提供したオーナーさんとの取り決めや収益が出たときとの分配などについては、ダルクに理解をもつ農家さんの存在を述べた上で「他の農家さんから 1 反歩 (約 9 ・ 9 ㍓) 1 万円で借りた。ナスの出荷の手伝いの代わりに、イベントのナスを提供してもらうなど試行錯誤でやっている」と回答。「実際の売り上げでは農協に出荷して 20 万円出たが、経費で消えた。アルバイト代も (施設からの) 卒業に向けて貯めるよう検討している」と答えました。

＊「おいしいお米ができればいいな」

柴田施設長の講演の後、潮騒 J T C のカズさんが農業体験などについて話してくれました。カズさん



は薬物使用を経て潮騒にたどり着いたものの、「3 回目にスリップして気づいたことは『自分はまだ回復していないし、自分はハイパーパワーで守られている』」と話しました。現在取り組んでいる農作業について「おいしいお米ができればいいなって感じた。仕事をしていけば (薬物などを) 使わないし、達成感もある。農業もやっていれば楽しいし、いろんな経験になる」とも話しました。

会場には潮騒 J T C の仲間の他に、交流会のために潮騒を訪れていた横浜ダルクの仲間たちも参加しました。柴田施設長は午後、鹿嶋市内の潮騒ダイケアと潮騒が運営する水田を視察しました。(か)

【柴田隆治さんプロフィール】昭和 36 年、秋田県生まれ。高校卒業後トラックの運転手などをしていましたが、飲酒運転で免許取り消しに。その後派遣会社に務めるも飲酒がひどくなり精神科病院に入院。退院後も就職できず、飲酒も止まらなかったが、平成 16 年に栃木ダルクにつながり回復の道へ。平成 22 年 4 月那珂川 C F 開設と同時に責任者に。「能力がなくてもプログラをやり続けると居場所ができる見本」を自認する。

●自助グループメンバーが潮騒にメッセージ



潮騒 J T C の支援者でアルコール依存症の自助グループで熱心に活動しているケイイチロウさんの尽力で取り組む「潮騒アデクションセミナー」が3月末、鹿島市まちづくり市民センターで開かれました。主に千葉県

内の自助グループで活動するアルコールやギャンブル依存症の仲間 6 人が過去の壮絶な体験を忌憚なく話してくれました。

施設とは違い、何かとストレスの多い地域社会で暮らす仲間たちの貴重なメッセージとあって、入寮者たちは熱心に聞き入っていました。スピーカーの皆さんの発言には前向きな生きざまが感じられ、とても励みになった様子でした。なお紙面の都合で掲載が遅れて申し訳ありませんでした。

●日テレのニュース番組で取り上げられました

潮騒 J T C の活動の様子が 5 月 13 日、日本テレビの夕方ワイドニュース「news every (ニュース・エブリイ)」で取り上げられました。「女性のアルコール依存問題」をテーマに特集枠で放送されたもので、メインは潮騒が定期的にメッセージをさせて頂いている秋元病院（千葉県鎌ケ谷市）のアルコール専門病棟の

施設の話
あれこれ

入院患者を追った内容でした。その関連でアルコール依存症の女性 6 人が入寮している潮騒取材したものです。

各種メディアの取材に対し潮騒 J T C は、その取材目的が依存症の回復にとってプラスになるものならば、そして入寮者のプライバシーに十分に配慮したものであれば、基本的に応じています。テレビは影響力が大きく、一度放送されるとイメージが固定されてしまう恐れがありますが、今回の放送は女性のアルコール依存の回復の難しさをリアルに伝えてくれました。

●栃木ダルクの 10 周年記念フォーラムに参加

薬物やアルコール依存症の先進的な回復支援で知られる N P O 法人・栃木ダルク（栗坪千明代表）が設立十周年を迎え、3 月 16 日に宇都宮市内で記念フォーラムが開かれました。潮騒からも 13 人が参加し、節目の年を迎えた栃木ダルクを祝い応援しました。

栃木ダルクは 2003 年に茨城ダルクの関連施設として那須に設立されました。栗坪代表の個性を反映した独自の回復プログラムは関係者の評価が高いです。精神科病院や保健所、県薬務課、保護観察所、県警など行政や関係機関と強固な連携関係を築き、連携した矯正施設出所者の再乱用予防プログラムなどで実績を築いています。

フォーラムは栃木ダルクの歩みや活動状況の報告があり、茨城ダルクの岩井喜代仁氏や日本ダルクの近藤恒夫さんらが講話し、基調講演では国立精神・神経医療研究センターの和田清氏が社会問題化している脱法ハーブ乱用の実態に「人体実験をしているようなもの」と厳しく警鐘を鳴らしました。



進藤龍也牧師を訪ね講演を依頼

栗原豊施設長とアディクトの入寮者2人が5月13日、埼玉県川口市のキリスト教会（罪人の友 主イエス・キリスト教会）

を訪ね、元ヤクザだった進藤龍也牧師に今秋に開く潮騒フォーラムの講演依頼をし、正式に受諾を頂くことができました。進藤牧師との懇談の内容については今後、本通信でも随時紹介していきます。進藤牧師は4冊の著作を

著し、各種メディアで活躍が取り上げられていますが、実際に会ってみるとキリスト者の手本のように謙虚

で温かく、クレバーな人でした。進藤さんとは親子のような世代関係ですが、実は栗原施設長もかつて裏社

会に身を置いた時には同地区も活動範囲だったようで、偶然ながら同行した入寮者2人も現役のヤクザ時代には同所に土地勘があり、話が盛り上がりました。進藤牧師は信仰や就労、生活保護の問題などで潮騒JTCの考え方と共感する部分が多く、ダルクの中では潮騒JTCが教

会と地の利を得ていることから、今後は依存症者の回復について連携していくことになりました。(み)



我が回復記

「どっこい私も生きてます！」～N02（依存症のサカです）



北海道ダルクに行く決心をした私は、とかちダルク（帯広市）の施設長と手紙のやり取りを始めました。その過程で少しずつ「ダルクでなら自分もやれるのではないか」という気持ちになりました。満期出所でしたが、この施設長が迎えに来てくれたことから、とかちダルクにつながりました。しばらくすると私が想像していたダルクのやり方と、いざ入所してからの現実とのギャップに戸惑いを感じるようになりました。私の病の一つに「勘ぐりがひどい」があります。思い込みが激しいせいか、「とかちダルクは自分には合あわない」と退寮を申し出ました。そんな私に、施設長は「人それぞれ、合う合わないの施設があるから」と、施設移動を勧めてくれて、私は山梨ダルクへと行くことになりました。内心では「これで関東にただで帰れる」という甘さで旅立ったものですから、一カ月も持たずに山梨ダルクを自主退寮し、ダルクとは縁を切ってしまいました。生意気にも自分の力でやろうと考えたのです。その頃3カ月クリーンになっていたので「もう大丈夫」と勘違いしてしまったのです。

しかし、この世知辛い世の中、ムショ帰りのヤク中に仕事なんて見つかるわけはありません。そこで私は就職活動を諦め、てっとり早く金になる元の職場？ に復帰することにしました。昔の仲間とまたもや覚せい剤の密売をしたのです。初めは「売る」ことに専念していたので体にはシャブは入れなかったものの、飛ぶように売れると「自分も一発入れれば」と悪魔のささやきが聞こえるようになりました。朝も昼も夕もなく運び屋をすることで、睡眠をとるために身体にシャブを入れ始めたのです。それからというもの、快樂におぼれた変態セックス→運び屋→そしてまた変態セックスという毎日で、元のもくあみとなりました。

ただ、昔と違うのはダルクに行ったせいか、シャブを身体に入れて狂った変態セックスをしても、昔のように楽しめなくなったのです。後ろめたさというか、もどかしさというか、空しさがつきまとうようになって昔のように楽しめず、逆に苦しんで日々を過ごしている感じがえあったのです。習慣というのは恐ろしいもので、たかが三カ月ダルクにいただけで覚せい剤に対する恐怖とためらいが生まれていたのです。(次号へ続く)

近藤恒夫氏インタビュー「薬物依存と回復の権利」VOL13

金が上から流れてくる間に、まずこっちが取って、次にあっちが取ってと予算の奪い合いなんだ



●役人の頭には地域に任せる考えなんてない

一地域の自立について話を続けましょう。

近藤 どうやら日本の社会はシステム自体がおかしくなっていないか。僕は地域が自立しにくい流れになっているように感じる。国は肝心なところで地方に自由にさせていないからね。だって税金の配分や使い道をみればよく分かる。名前からして地方交付金だよ。国が地方をお金でコントロールする構造だな。よく言う地方の「三割自治」ってやつ。(注・地方は自主財源が乏しく、地方交付税交付金や国庫支出金に依存する構造をいう。実際には4割)。

もっとも国が地域のためにと予算を組んだとしても、途中には奪い合いの関係がつかまとう。結局、我々のような日陰者の活動には微々たるお金しか来ない。お金が上から流れてくる間に、まずこっちが取って、次にあっちが取ってと予算の奪い合いなんだ。いいところは国家がとって、次に自治体がとって、残りかすが我々にとっていう流れなんだな。国を動かしている政治家や役人たちの頭の中には所詮、地域に任せるなんて考え方が全くないんだ。目立つことは全部自分たちの手柄にしようとする。例えば法務省は民間刑務所だってやっているけど、肝心なところは民間には渡さない。教育とかは苦手だから民間に渡すけど、ほかのいいところ、人事とかはがっちり握っている。そうして潰れるところを待っていて、「ほらみたことか」と。それが現実だから。表向きは民間刑務所に任せているように見えるけど、国がコントロールする仕組みは変えない。だって「官民(刑務所)」と言ってくれって(笑)。どこまでいっても官、つまり「お上」が上で、「民」

は下なんだ。「民官」という発想はない。

●水戸黄門が最後に印ろうを出すのはずるい

一確かに日本は「お上」意識が強い国ですよ。 「お上には逆らえない」「お上には楯突くな」と庶民が相互に監視し合う土壌が根付いています。

近藤 国家が絶大な権力で国民を従属させる仕組みが徹底している。僕はよく水戸黄門を思い出すんだ。たかがテレビの時代劇なんだけど、悪人を懲らしめるためとして助さん格さんにさんざん下っぱの人間をやっつけさせて、最後に「もういいでしょう」って印ろうを振りかざすあの場面。権力のシンボル(三つ葉葵)で「これが目に入らぬかー」って。悪人も「恐れ入りました」とひれ伏すよね。あれずるいよな、初めから印ろう出せば被害がでなくて済むのに。斬られる方は上の命令で仕方なく向かっていくんだから理不尽だよ。戦争もそうだけど。

一その意味でダルクの存在は地域の自立を促すヒントになりますよね。何も権力に頼らなくたっていい。自分たちでできることは自力でやるんだというスタンス、まさに地域の自立につながる。

近藤 みんなやりゃいいんだよ、名もない貧乏なダルクがやってるんだから。でも、今の世の中って権威や権力にすり寄ってお墨付きをもらうことが当たり前になってるだろう。冠がついていないと何もできない。自分たちで何とかしようっていう発想なんか生まれない。できるだけ無難に、横並びになってなる。国立病院みてごらん。工場みたいだよ。造り方から何から、どこに行っても金太郎アメ状態…。

一学校もそうですよね。どこも同じ造りで。

近藤 あれ見ると「日本って共産主義の国だったっけ」って錯覚しちゃう。自由な発想とか独創性とかあっちゃだめなんだよ。全部「お上」の規格に合わせないと。だって言葉からしておかしいでしょう。いちいち何をするにも「許可申請」だよ。「お上」をお願いして許しを乞う。へつらわなければならない。日本人は体質的に自虐的な民族なのかもしれないね。僕はそんなの当てにしないで、どんどん自由にやればいいって思う。 (次号に続く)

全国受刑者の皆さんからの手紙～潮騒通信「どっこい生きてます！」を読んで

■ハルさんはスタッフとしても立派な人でした

…少し前の潮騒通信にハルさんが載っていましたね。立派な人ですね。アルコールは本当にすぐに手に入ります。仲間からの誘いもあるのにスリップすることなく自助グループとの出会いも偶然というか、本当に不思議な力と出合って信じがたいですが、やはりハイヤーパワーの力を信じるしかないですね。ハルさんは2年近くきちんと回復プログラムと向き合って、またスタッフとしても立派な人でした。さすがハルさんと思いました。私のような半端者が言うのも変ですが、ミーティングは大事ですね。話すのは苦手でも聞くことはできます。落ち着いた気持ちで、薬物依存者の話を聞く事も大事な時間だなと最近思うようになりました。(愛知県 Y・K)

■若い頃プロボクサーで4勝2敗の戦績だった

私はすべて覚せい剤絡みの罪で初犯を含め計4回の受刑生活を送る者です。今度こそは本当に、これで最後にしたいと強く思っています。どうか力になってください。それでも若い頃は板前をしながらジムへ通い、プロボクサーC級ライセンスを持って6戦し、4勝2敗の戦績を残しました。23歳で引退しましたが、過去の栄光にひたるつもりはありません。ただ、目標があれば願いは叶うものだと思っており、なんとか努力してクスリを断ちたいと考えております。こんな私でも目標を見つけたのです。結婚を真剣に考える女性ができるのです。まだまだ先が長いので生活設計をじっくり時間を掛けて考えていく所存です。(東京都 S・K)

■「止めるのではなく、止め続けること」を実感

…(栗原) 豊さん、覚せい剤というのは怖いものですが、本当に俺自身も止める事が出来ますか？ 正直、覚せい剤を絶ちたい思いを持っているのですが、いざ自由が手に入ったら覚せい剤を絶てるか不安でいっぱいです。確かに覚せい剤をやり続けてきた俺には、止めるという事は並大抵の事ではないと思います。近藤恒夫さんが「止めるのではなく、止め続けることだ」と本の中で言っていました。俺も正直もう負けたくありません。無制限一本勝負、負けられない勝負です。覚せい剤をやっている、確かにその時はいいのですが、無くすものはそれ

以上に大きい事を実を持って感じました。豊さんの力も必要かと思いますが、その節はよろしくお願いします。

(北海道 Y・K)

■メンタルな本質は何も変わっていないのでは…

以前お話をいただいた神の意思について時折考えます。確かに覚醒剤にまみれた私の意思と云うものは傷つき壊れているに違いありません。強制的ではありますが覚醒剤を使わぬ生活の中、依存症という病気とは向き合ってはみるものの、その時々私には足りないものばかりです。厳しさであったり、優しさ、忍耐であり、誠実さでありという風に。これらの欠陥は覚醒剤がもたらしたもののなのか、元より私自身なのか。今では覚醒剤を使った事のない時代の私を思い出そうにも、そのころ自分がどう云う男だったのかさえ分からず仕舞です。

現在の境遇から解き放たれるその日を想うと、その日が近づくとびに頑張るんだと励むその裏に、もう一人の自分が存在して、此のままではまた性懲りもなくまたやらかしてしまう、確実に覚醒剤を使うであろうと予測する、自分が居るのです。此処に服役し、自己改善を唱えながらも何事にも足りない私のメンタル的な部分の本質は、実は何も変わっていないのでは…、とも想ったりするのです。肉体的な要求が消えない依存症の困難と、神の意志の必要を改めて想う次第です。依存症の困難を認識する度に覚せい剤をバラ撒き続けた罪の深さを想います。(北海道 Y・K)

■仮釈は後から付いてくる、貰えなくてもいい

栗原さん。私は仮釈狙いとかそういう気持ちで便りを出した訳じゃありません。恥ずかしい話、今回で受刑生活…10回目、その中覚せい剤が今回で7回目、20才から今、50才ですが塀の中に行ったり来たり、このままでは自分の人生が塀の中で終わってしまうと思い、薬の世界からぬけ出すにはどうしたらいいか考えたら、最後には潮騒ジョブしかないのではないかと思います、こうして便りを出した次第です。だから、私は仮釈狙いとかと言う人間ではありません。仮釈は後から付いて来る物であって別にもらえなくてもいいと、私は良いと思っています。

(福島県 K・K)



～4月句会入寮者作品～

しおさい俳壇

～選者＝桐本 石見先生～

池の日にお玉杓子が泳ぎある

(チーナ)

最近ではお玉杓子も少なくなりましたが、それでもこの鹿島、潮来などの沼や池では見ることが出来ます。三月の春めいた池の日和にお玉杓子を眺めると心が安らぐ、子の日を偲ぶ句です。

蝌蚪掬ひ裸足ではしゃぐ子供たち

(コジ)

昔の田舎の子供の遊びの一つは、川などで小魚やお玉杓子などを捕らえて楽しむこともあった。選者も魚や海老、蟹などを捕り祖母に料理してもらった。昔の子の声が聞こえる句です。蝌蚪は「カト」と読み、お玉杓子の別称でもあります。

蛙の子手足のばして蓮の上

(かつちゃん)

お玉杓子もやがて手足が出て蛙にちかくなり、蓮の浮葉の上で休む。歌にも鯰(なまず)の孫では無いとある様に。こうした光景は四月頃には良く見かけますが、旅の一時などを和ませる句でもあります。

田の中のお玉杓子や手足生え

(ヒコ)

お玉杓子は田や池や川などに生息しますが、田圃(たんぼ)に居るのが一番良く見えます。春先の田圃の水に手足の生えたのを見ると少し奇異にも、また自然の偉大さにも感嘆する、これもまた自然詠の句です。

和む日にお玉杓子の田植えの譜

(ヨシ)

お玉杓子を音符に例えるのは昔からありますが、この句の様に田植えの譜に思うのは珍しい。「揃った揃った早苗が…」など地方によりいろいろな田植え唄がある。面白い句です。

お玉杓子の子の日の遊び思ひ出す

(ヒコ)

池や田圃のお玉杓子を見ると、ふと子供の頃の遊びを思い出して懐かしい。人それぞれに故郷があり、その頃の遊び仲間の顔も思い出す。男の子なら川や池などでの魚捕りも思う一句です。

手足出づ蛙となる日もう間近

(オノ)

原句の「苗が伸び」を手足にして、お玉杓子に視点を合せました。苗は稲のことですが、それよりもお玉杓子の僅かな手足に思いを込めた方が幼い命に情を思い、俳諧の憐れもある句になります。

潮騒俳句会の一コマ



=5月誕生日の仲間たち=



後列左の仲間からタカイチ・コウジ、手前左からイチ・タッキーの皆さんです。

ほこほこと土の中より春生る

(章三郎)

春は啓蟄、草萌えの候でもあり地一中から虫や草の芽が出る、その虫や芽の出るのをほこほこと云う形容も温かみがあって面白い句。大地には地熱があって冬の眠の動物や種や芽を護り、春を生む自然界の摂理でもある。

高度万眼下は円の夏野かな

(豊)

飛行機の旅をすると高度は一万ftとか、富士山が見えますとかアナウンスがあります、小さい窓から雲間の眼下を眺めると青緑の夏の陸地や海、島が見える。これも夏の旅の清々しい句です。

しおさい俳壇・秀逸句コーナー

音符にもお玉杓子やドレミ歌

(カツミ)

音楽の楽譜の音符もお玉杓子と云うことがあるし、形も似ている。大昔の人はお玉杓子を見て発案したのかもしれない。因みに音符は紀元前に棒線で書き、十三世紀頃に現在の形になったとも。一句も面白く歌が湧きそうです。

笛の音やお玉杓子の跳ねる様

(コバ)

笛の音にもいろいろありますが、獅子舞の笛などは跳ねる様な感じでリズムもある。田舎の春祭に、田圃のお玉杓子でも見ている思いにもなります。面白い発想の句です。また、田植え終えの句は「春を呼ぶお玉杓子に耕せる」くらいが良いです。

蓮の池お玉杓子のかくれんぼ

(ハル)

池などのお玉杓子を見ていると、群れたり一匹で泳いだり休んだり様々であるが、蓮の葉にかくれんぼと云う発想も童心を甦らせて面白い。俳句もそうした遊び心から詩も生まれます。

あまのじゃくお玉杓子に似たるかな

(ポチ)

「あまのじゃく」は我がままな意であるが、仏語で天邪鬼、神話の中では天稚彦、中国では海若（あまのじゃく）とも謂われる。お玉杓子も蛙の子で、わがままかも知れない。面白い一句です。

痩せ蛙お玉杓子を特訓中

(ヨシハル)

雪小林一茶の句に「痩せ蛙負けるな一茶是にあり」がありますが、これはその句を思つてのことかも。生れたお玉杓子を強い子になる様に訓練をする発想は面白い。人間の社会も同じで悪にも誘惑にも勉強にも強くなりたい。

* 4月のお題は「お玉杓子（おたまじゃくし）」でした。

おめでとう！！
今月の特選句です

池の面に子供の笑顔蛙の子

(長吉)

原句を少し変えましたが、これで池の蛙の子を覗く子供等の笑顔が見える景の句になり、また水面に映る顔も彷彿できます。今では池や小川に蛙の子、お玉杓子も少ないが、子の日の懐かしい景でもあります。

尾をふりつお玉杓子の影哀れ

(ミミ)

お玉杓子にも大きいもの小さいもの、黒いもの淡いものがありますが、総じて何か一抹の哀れを思う姿でもあります。また彼らには父母が側に居るわけでもなく自然の厳しさに耐えて一人で生きていくのです。黒いその影にも心を寄せる哀憐の一句です。

北の大地畑に残す箱スキー

(潮騒・豊)

地北の大地は北海道のことですが、そこに見える丘の様な広い畑もまた大地と云うに相応しい広さです、その丘畑に子供達の遊んだ箱スキーが忘れてある。春の名残りの一句かも、北海道はまだ残雪も多い。

Information

行事予定 (5月中旬～6月中旬)

- 5月14日 潮騒「北浦田んぼ」保育園児と田植え
20日 新宿とまりぎアルコール問題相談業務
25日 NPO法人・潮騒 JTC2013 年度定期総会
26日 潮騒5月家族会、薬家連総会・10周年フォーラム
27日 潮騒 JTC 入寮者5月誕生会
29日 潮騒俳句会 (しおさい俳壇)
6月2日 みのわマックセミナー (フォーラム)
6日 条件反射制御法研究会
9日 秋元病院メッセージ (15日も)
14日 川崎ダルク9周年フォーラム
16日 横浜ダルクフォーラム



献金を頂いた方 (5月15日現在)

- ▼石井 照明 様
▼小橋 ひとみ様

献品を頂いた方 (5月15日現在)

- ▼茂木 みつ子 様

☆そのほか匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させて頂いております。どうぞご理解の程をお願いします。

【インフォメーション】潮騒 JTC の公開フォーラムは11月17日に地元、鹿嶋市の鹿嶋勤労文化会館で開きます。午前中がファイザー報告、午後が進藤牧師による講演など多彩な内容を予定しています。

田植えの休憩タイムに保育園児たちとくつろぐ入寮者

編集・発行

特定非営利活動法人

潮騒ジョブトレーニングセンター (本部)

〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱34号

〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台210-10

TEL/0299-77-9099 FAX/0299-77-9091

潮騒リカバリーホーム (中施設)

〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱56号

〒311-2213 茨城県鹿嶋市中2773-16

TEL/0299-69-9099 FAX/0299-69-9098

潮騒スリークオーターハウス鉾田

〒311-2113 茨城県鉾田市上幡木1113-39

E-MAIL k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>

編集後記

読者の皆さんに読まれるニュースレターを、と毎回頭を悩ましていますが、時間の制約と貧困な頭ではどうしても毎号、同じような作りになってしまいます。加齢とともに自分が否定していた守旧派になっているようです。昔の友人が見たら笑うでしょう。「お前も随分ダメになったな」と。頭では「もう失うものがない人間ほど強いものはない」と分かっているけど、現実には重くしんどいですよね。(市)

今月のスタッフ写真



今月も善意の献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。